

古窯研究  
下原古窯の発掘に学ぶ

A Study on Old Kilns  
Learning from the Excavation of Shimohara Kilns

大藪幸博  
Yukihiro Oyabu

# 古窯研究一

## 下原古窯の発掘に学ぶ

(平成3年度特別研究)

下原古窯群は、現代の中部地方、陶磁器産業の原点であると言っても過言ではないだろう。それは下原地区の限られた地域に複数の古窯が存在する事、出土物に特徴的な埴輪や年代を断定でき得る物が数多くある事に代表されよう。保存を前提とした発掘も意義深い。

現在の桃花台団地は篠岡古窯群と称されるように一大古窯群であった。しかし現在は数個の窯が残存するのみで他はすべて滅失し跡形も無い。造形短大の移転時にたまたま東名高速道路沿いの斜面で大きな窯跡の発掘があった。斜面角度21度をはじめ3つの窯体が発見し、金属鑄造したと思われる遺溝も出現したが発掘調査後滅失した。三浦小春著(中部の焼き物)にもあるように、弥生時代に組織的に本格的な稲作が始まり、豪族が出現し、富を集め、権力を持った。それら豪族が自身の力を誇示するために大きな墓を作り、土器や埴輪を共に埋葬する習慣が生じ、制作する技術手段を持つ土師部が組織された。各地に点在した豪族たちは競って埴輪や土器を作らせたのであろう。そして、より高度な技術をもった集団を集めたのであろう。朝鮮から呼び寄せたか、百済の官人が多くの技術集団を引き連れてきたかは分からないが、日本書紀の雄略天皇七年(463年)に「新漢陶部高貴いまきのあやのすえつくりこうき」らが日本に来たと書かれてある。彼等は陶工であり同時に築窯師でもあった。彼等の築く窯は山の斜面を利用した形の穴窯であった。この窯の出現で初めて1000℃を越える熱で製品が焼かれた。また彼等はロクロを使用し、ハソウとか高杯などの器も中国の殷、漢代の灰釉、新羅系のものであった。



▲下原古窯群周辺風景  
左手竹林の中に古窯は位置する

### 1. 下原古窯群の位置について

名古屋造形短大の西南西、約4kmの小牧市と春日井市の境界近く、春日井市の北外れに東山町がある。そのなかの春日井桃花園団地に隣接した、北に緩やかにおりる斜面に桃畑があり古窯は位置する。周囲には竹林があり、そこだけぽっかりと空がみえ桃畑のどこに窯が存在するのか分からない静けさのなかに古窯は眠っている。

### 2. 調査に至る経過

当古窯の存在は昭和30年以前に地元研究家の間でその存在を知られていた。昭和36年、「春日井市史」編纂事業の一部として考古調査の行われた際、名古屋大学考古教室によって、下原第2号窯が発掘された。それから28年後の89年3月にその再調査と、保存および付近一帯における古窯の確認を目的とした再発掘が行われ、その結果新たに3号、5号が発見され、そしてこの8月の第3次の発掘調査で、さらに6号と7号と窯体が確認された。調査にあたっては日本考古学会会員、春日井市文化財保護審議会委員の大下武氏の指導の下、春日井市教育委員会があたった。

### 3. 調査結果

#### 第2号窯

全長約10m・最大幅1.5m。焚口から上へ燃焼室・煙道部と続くが、煙道部は隣地にかかるため、未発掘である。窯壁は、部分的に数度以上の補修跡が認められる。また、床面の補修については、この時期において一般的と思われるが、焚口付近において21面を数えるのは、珍しいことである。窯の築窯時の焼成面と、最終の焼成面の差はなんと80cm程である。最終面における床の傾斜角度はおよそ30度である。重なり合う床面は、それぞれ焼成部の遺物を残しており、それらを採集検討することによって、この窯の使用期間を推定されるはずであり、逆に、限定された範囲での土器の編年も可能となろう。現在調査中である。第2号窯は築窯時の床面まで掘り下げた後、重層する面を輪切りの形に樹脂で固めて標本として保存する予定である。また窯本体も、樹脂で固め、保存する予定である。

### 第3号窯

全長約12m・最大幅1.5m。焚口から煙道部までと、焼成室天井の一部がのこっている。全体の様子をうかがえる、貴重な窯である。天井の高さは1.2m、床面の傾斜角度は22度である。煙道部の立上りを2度にわたって手前にずらしてあり、結果、約1mほど窯が縮小されている。左右の壁も5～7回の補修が認められ、床面も焚口付近で3面の重なりが認められる。調査後天井部分は樹脂により固定される予定。

### 第5号窯

窯としての形は不明であるが、煙道部奥壁の立上りだけで60cmを計測する。

その右端に煙道が設けられている。床は平らであり、1m角である。発掘当初は下方に続くと考えられ、壁によって削りとられた形を想定したが、当然残るはずの焚口周辺が残っており、また窯体残存部の手前がわずかながら立上りを見せており、閉じる様子である。窯内遺物が一辺も採取できないため、時代を特定できないがなにか特殊な窯である可能性が強い。

### 第6号窯

全長8m窯体上端において最大幅1.5mである。

第3次調査中に発見された。2号窯と3号窯の中間にあつて、地下式の穴窯である。穴窯には半地下式と地下式の区別がはっきりしないものが多いが6号の場合、煙突の立上りが1.3mにわたって確認され、土中をくりぬいて作られていることが想定される。

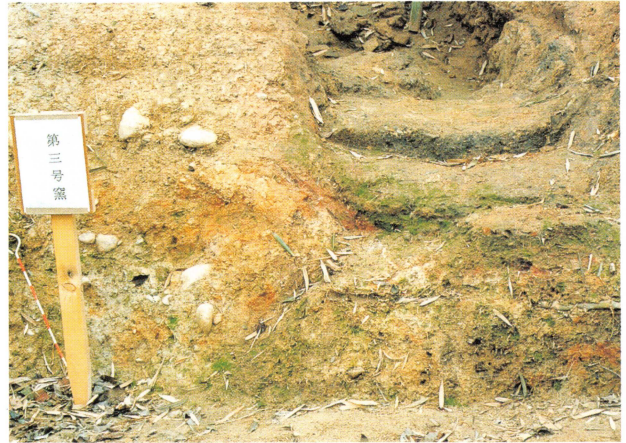
### 第7号窯

全長8.3m、最大幅2m

第3次調査中、2号窯の東側斜面から発見された。燃焼室と焼成室の間に分炎柱の存在が推定される。分炎柱によって天井部分は強化され窯の容積も大きくなった。また残存する可能性も多い。7号窯の場合その上端部が現れていると思われる。分炎柱の出現は平安瓷器窯以降であるから、当古窯群の1～6号と比べて新しい窯である。

### 第8号窯

2号窯と7号窯の間に位置する。もしくは存在したと推定される窯である。2号窯のすぐ左から、多量の灰と遺物が検出された。遺物から2号とほぼ同時期の窯と推定されるが、2号の灰が人為的に移動されたの



▲第3号窯



▲第6号窯窯内



▲高坏の一部



▲ 6号窯天井部

か、窯の本体が流出してしまったのか、本体が地下式であるのか、まだ不明である

#### 第1号窯

2号窯より上方に、ほぼ平行に存在するらしい。灰原による確認から、窯体の存在が期待されるが隣地に入り込むため、今回の調査は見おくれた。

#### 第4号窯

2号窯を中心とする群からは、200m程西に位置する。すでに第1次調査の際、分布調査によってその存在が知られていた。円筒埴輪が採取されており、2号窯とあまり隔たりのない時期の窯と考えられている。ただ単一で存在するとは考えにくく、近々周辺部の調査が行われる予定である。



▲ 3号窯アーチ部分

## 灰原

各窯で焼成された製品のうち、不完全な物を灰と一緒に捨てた場所である。従って各窯が焼成した製品の種類、焼成の時期および期間などを知るためにそれぞれの灰原を特定しなければならない。しかし実際には下方において交錯するから、その特定は困難な作業であった。現在特定をみたのは1・2・3号の限られた範囲のものであった。多くは今後の検討が必要である。

### 作業場・住居跡など

今後の最も重要な調査項目であると思われる。これだけの長期期間にわたっての焼成、補修が行われた事実や、各時代の特徴を示す出土品からもかなりの長期にわたっての生活がこの地で営まれた事が想定できる。灰原の下方、あるいは窯の上方の平坦部にその可能性があると思われている。



▲ 3号窯アーチ正面

#### 4. 出土遺物

1・2・3号窯を中心とする出土品である。いずれも古墳時代の6世紀初頭を中心としている。その中でも最も古いものを5世紀代のどの辺りに位置させるか、今後の形式分類を行う上で、検討がすすめられるであろう。器形の種類は下記に分けられる。

- 1、蓋杯 2、高杯（有蓋・無蓋） 3、甕 4、埴瓶
- 5、はそう 6、甑 7、瓶 8、短頸壺 9、器台
- 10、陶錘 11、円筒埴輪 12、形象埴輪（人物・家形等）



▲出土品  
珍しい4本指を持つ形象埴輪



▲円筒埴輪の一部



▲アーチ部分



▲灰原タチワリ、多くの出土品が見える



▲出土品

春日井  
下原

# 新たに3基発見

## 20回も床補修の跡 古窯

# 古窯跡群だった

春日井市教委が三月中旬から進めていた同市東山町の下原第二号古窯の発掘調査がこのほど終了し六日、結果の発表をした。これによると、二号古窯周辺に新たに三つの古窯が発見され、一帯が古窯跡群であることが分かった。千二百度以上で焼く須恵器の出土品も数多く、東海地方の古墳時代の変遷を知るうえで重要な手がかりとなりそう。

下原第二号古窯は、桃園団地近くの民有地の竹やぶの斜面にある。傾斜約三〇度の登り窯の形をした半地下式古窯（あながま）で、全長約十メートル、最大幅一・五メートル。五世紀末から六世紀初めの窯といわれている。

調査では、側壁の内側を三回、窯床を二十回、土を積み重ねた補修跡を確認。中に残った灰が、熱で溶けて灰釉（ゆう）となって土器に付着したらしい。

日本考古学協会などでは、須恵器の生産は一年に一度という伝説があり、同古窯は補修跡からみても最低でも二十年は使われていたことになる。窯床は補修ごとに積み重なった壁になっており、高さ八十センチ。壁ごとに円筒埴輪（は）にわし片などの須恵器が発掘された。下部の床からは、ふたのない高坏（たかつき）が発見され、上部からは、ふたと脚のついたものが見つかった。二つの高坏には、最低五十年ほどの年代差があり、同古窯は一度、放置され、再び使用された可能性が高い。

新たに発見された古窯は、第二号の西隣、さら西側二十メートルに二つ並んでおり、それぞれ一号、二号、三号と命名された。四号は、二百メートル西に発見されている。

三号古窯は、天井の一部と、煙を出す煙道が残っており、ほぼ完全な状態。天井まで残存する古窯は極めて珍しいものという。

四つの古窯は、出来の悪い土器や灰を捨てる灰原も含めて、すべて三十メートル四方の敷地内に収まっている。

下原古窯は、同市二子町の国指定重要文化財二子山古墳の副葬品の円筒埴輪を焼いた窯と伝えられていた。同古墳と古窯の成立時期が一致していることが分かり、証明への手がかりとなる。

同古墳は、県下最大の名古屋市熱田区、断夫山古墳に埋葬された尾張氏の支配圏が広がって造られたと考えられる。当時の支配権力者が、渡来人の須恵器技術集団と元来の埴輪工人を中央から呼び寄せ、下原古窯で埴輪を焼かせたと推定できる。

市教委は、新たに見つかった三つの古窯の発掘調査を七月下旬から本格的に行うことにしている。

同古窯は昭和三十六年に名古屋大学考古学研究室が試掘して以来、手つかず。土地の所有者が耕地したいと申し出たため調査を行った。調査では日本考古学協会員の大下武・県立千種高校教諭が指揮し、中京大、南山大、奈良大学の考古学専攻生十人が作業にあたった。

市では、市内の古窯を一カ所に集める古窯センター整備構想があり、市は古窯群が発見されたことにより、下原古窯全体の保存を検討する必要があるとしている。



▲坏 高坏 甕



▲灰原の炭化部

中日新聞記事より抜粋

春日井の  
下原古窯

# 大規模な古窯群だつた

## 第3次調査 新たに2基 5本指の埴輪片も

春日井市教委は二十九日、同市東山町の「下原古窯」の第三次調査の結果を発表した。これによると、前回三月の発掘調査で見えられた三基のほか、新たに二基の窯が見つかり、六基の古窯が約四十メートルの間にあり、大規模な古窯群であることが分かった。市教委は今後二年間は、さらに本格的な調査を続け、全容を解明することを決めた。

発掘調査は七月二十四日から日本考古学協会の大下武・県立千種高校教諭の指導で大学生が参加して行われた。下原古窯は、同市北部の桃花源園地近くの民有地の竹やぶ斜面にあり、五世紀末から六世紀初めの古墳時代の古窯とされているが、昭和三十六年に名大が第二号窯を調査して以来、手つかずのままだった。

新たに発見された古窯は、第二号窯の西約十メートル、南東約十五メートルにあり、二号窯を間に挟んであり、それぞれ六号、七号と命名された。六号窯は古墳時代の地下式の登り窯で、地中からの煙出しの煙突跡が約一メートル残っている。七号窯は、半地下式登り窯で、たき口には火を効率よく奥まで登らせる分煙柱の跡があることから平安時代の古窯とみられる。

前回の調査で見つかった三号窯の本格的な発掘も行われた。同窯は古墳時代の窯としては珍しく天井部分が約二メートル残存していた。窯の全長は十二メートルで、たき口の幅は八十センチ、最大幅は約一・二メートル。煙を出す煙道部に修復跡がある。市教委は、同窯が県下でも貴重であることから、保存のための樹脂注入をすでに始めている。出来の悪い土器や灰を捨てる灰原や窯床などからは、膨大な遺物が発掘された。埴輪

(はにわ)片も多く見つかり、水鳥の頭をかたどったと見られる動物埴輪の一部や、人物埴輪の手の部分などがある。手は、ふつう親指以外は線を引き、四本の指を表すが、見つかったのは四本とも指が分かれていた。市教委は、今回の調査で、同古窯群が古墳時代と平安、鎌倉時代の古窯が並んでおり、一大古窯群だとしている。調査地と同じ斜面の続き南西約百メートルにある第四号古窯との間

にも未発見の古窯群、工人集団の住居跡、作業場跡があると予想。今後は、保存方法も含め、周辺の大規模な調査を検討している。一般市民には、文化財保護強調週間にあわせ十一月十二日に現地説明会を開く予定になっている。



▲28年前名古屋大学が調査を行った7号窯



▲表面採集の遺物



▲竹林に露出する遺物

## 5. 下原古窯の立地について

窯の立地条件として、良質の粘土と豊富な燃料である薪が必要である。現場の地山露出部に見られる粘土層のうち上層はやや荒く、下層の粘土層は緻密である。その2種類の粘土を用いて常滑の陶芸家、竹内公明氏が復元されたとき、ねばりがいいということであった。燃料の薪は当時、この地域に自生していた雑木林を伐採して用いたのであろう。やがて燃料の枯渇と共にこの地を離れ、再び戻ったのが平安時代であった。

## まとめ

- ・下原古窯群は、予想をはるかに上回る重要な遺跡である。
- ・10m以内に隣接しながら7基の窯が密集して存在する事。

5号窯をのぞいては、焚口から煙道部まで、ほぼ完全に遺存し、なかでも3号窯は、天井壁の一部残存がみられた。6号窯（未発掘）では、煙り出し部分の補修が極めて多いなど当地方最古に属する古窯の窯構造が明らかにされた事は大きい。

愛知県下で埴輪を焼成した古墳時代の須恵器窯の発見数は決して多くなく、当古窯より古いものとして東山111号、同218-1、同11号、城山2・3号が挙げられる。しかし、東山111号は灰原のみであり窯本体は消滅している。その他東山地区のものも開発時の発見であり、詳細は不明な点が多く、また現在は消滅している。城山2・3号も窯体の一部を認めるのみで消滅している。

こうした中であって、7基が集中し、うち5基が埴輪焼成の窯として残る当古窯の重要性は、例えば、埋蔵文化財として、十分な意味をもつであろう。

出土品についても当時の一般的な物から形象埴輪や円筒埴輪がかなり出土していることを考えると、二子山古墳（国指定）築造の支配者との関連が益々強くなってきていると思われるし、灰原の発掘面積はいまだ一割程であるが出土品の数は整理箱400箱におよぶ量である。こうした面からも未掘の窯や作業場所など付属の施設の遺構の出現に期待している。

## 追記 平成6年2月

その後の調査で下原古窯群は想像する以上に重要な遺物であることがすでに新聞紙上でも紹介された。その一部を紹介する。「古代の豪族、尾張氏の勢力下で経営されたとされる愛知県春日井市東山町、下原古窯群（五世紀後半―六世紀初め）の円筒埴輪が、美濃の古墳にも供給されていたことが奈良教育大の調査で分かった。同大の三辻利一教授（無機物理化学）が、ルビジウムやストロンチウムなど土に含まれる元素の比率が地域によって異なる特徴に目を付け、その比率から産地を特定する方法で埴輪片を分析。その結果、岐阜県の宮ノ脇九号墳（可児市）、美佐野高塚古墳（可児郡御嵩町）の埴輪と、下原古窯群出土埴輪のデータがぴったり一致したという。さらに岐阜県で最大規模の前方後円墳が集中する野古墳群（揖斐郡大野町）の南屋敷西古墳、不動塚古墳などの埴輪も「下原窯かその近くの未発見の窯で焼かれた可能性が高い」（三辻教授）ことが分かった。同古窯群には十一基の窯跡があり、うち八基が古墳時代の穴窯。埴輪を高温で強く焼きしめるなど須恵器と同技法で作られており、尾張型埴輪とも呼ばれる。尾張氏は尾張の国造（くにのみやつこ）家で、尾張連草香（おわりのむらじぐさか）の娘・日子媛（めこひめ）が継体天皇妃になるなど大和朝廷と関係が深い。愛知県埋蔵文化財センターの赤塚次郎調査研究員は「五世紀後半から台頭してくる尾張氏の力が濃美平野全域をカバーする形で広がっていたことを実証する貴重な成果だ」と話している。

下原古窯の重要性が立証されたことが分かる。造形短大のすぐ横で古い陶工が窯を焚いていたことを想像すると感無量の物がある。現在はテントで保護され一帯は立ち入り禁止になっている。今後の研究に期待する物が大きい。

終りに発掘時にお仕事の邪魔をしてしまった大下武氏をはじめ春日井市教育委員会の皆様にお詫びすると共に改めて感謝いたします。

参考文献 春日井市教育委員会資料

三浦小春著（中部の焼き物）中日新聞社刊